

ISBN4-7601-2252-4

C0021 ¥2000E

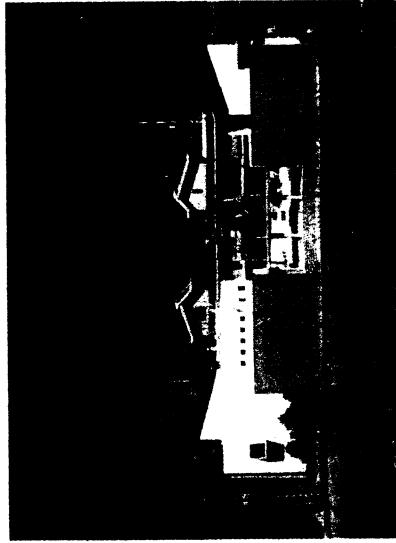
定価(本体2,000円+税)



9784760122523



1920021020001



つづき

048-2424

横浜市立図書館



2027754620

なつむの家歴史館ハンドブック

나츄의 이력

なつむの家歴史館後援

210.7

なつむの家歴史館 ハンドブック



나츄의

나츄의家歴史館後援会=編

柏書房

2部

ナヌムの家のハルモニたち



ナヌムの家から歴史館へ

徐 勝

ナヌムの家

1991年、日本軍「慰安婦」問題が社会の重要な論点として浮上してから、なによりも困窮な生活を余儀なくさせられてきた被害者に対する支援対策が急がれた。ここでは政府の対策よりは民間の運動が先行し、まず仏教人権委員会が中心となって、「ナヌムの家設立推進委員会」(委員長、宋月珠 前大韓仏教曹溪宗深宗務院長)が、1992年8月に結成され、同年10月、ナヌムの家が開設された。

ソウルの西橋洞ではじまったナヌムの家は、共同生活を希望するハルモニ、体を動かすのが不自由なハルモニ、一人暮らしのハルモニたちによる生活共同体である。これまで、入居ハルモニの変動はあったが、常時、10人前後のハルモニたちが暮らしてきた。

ナヌムの家は日本軍「慰安婦」被害者たちの共同の住居という意味を越えて、水曜デモへの積極的な参加、国内外の被害者発掘、ハルモニの証言や「ハルモニの絵画展」の巡回などを通じて、日本軍「慰安婦」問題の真相を国内外に知らせる役割を果たしてきた。なによりも、世界で初めての日本軍「慰安婦」の共同生活施設であるという象徴性を持っている。ジョン・ヨンジュ監督の「ナヌムの家」(原題:「低い声」)は、ハルモニたちのナヌムの家での共同生活を等身大に描き出し、世界の多くの人々に共感と感動をもたらし、ナヌムの家の名を世界に知らしめるのに大きな役割を果たした。

その後、ナヌムの家は篤志家が土地を寄贈し、民間募金と大韓仏教曹溪宗の支援で1995年12月、現在地に新しい施設を設けた。

歴史館の構想から建物寄贈に至るまで

1995年12月、ナヌムの家がソウル市内から「ハルモニたちの安住の地」として、京畿道の広州に移って間もなく、慧眞前院長は新たな構想をめぐらした。ナヌムの家をハルモニたちの生活の場としてだけでなく、記念＝生涯の痕跡を残す空間、さらに、すでに亡くなったハルモニたちの慰霊空間を合わせた三位一体のものとして、発展させようとするものであった。つまりナヌムの家を

過去（歴史記録）、現在（生活）、未来（懸念）の三位一体の空間としていく構想である。

1996年の11月、初めて来日した慧眞前院長から、「ハルモニたちの生涯の痕跡を残す」歴史記念館を設立する構想について相談が持ちかけられた時には、その着想と構想には基本的に賛同しながらも、資金や資料収集、参考とすべき人権・平和博物館などの見学、さらに学芸員の養成など、少なからぬ準備が必要だろうとの意見を提示したことがあった。「ふむふむ、そりゃそうですね」と、同意するような風であったが、その3カ月後には、韓国の新聞紙上に突如として、「挺身隊展示館起工式」という大見出しが躍っているのを見て、開いた口がふさがらなかつた。人の言うことを聞くような振りをするが、決して聞かない慧眞前院長の面目躍如である。そして、97年3月には起工式が華々しく行なわれた。全ては、高度経済成長の神話の中で育てられた「急速」「巨大」を尊ぶ、闇雲な韓国式突貫手法ではあるのだが……。

「日本軍『慰安婦』歴史館」の名称が決定するまでも曲折をへた。「博物館」「歴史博物館」なども提示されたが、小規模な資料館にはささわしくなくとして退けられた。「この施設が日本軍『慰安婦』関係の一流の資料を集めた一級のミュージアムになるのは、無理な要求で、ハルモニたちの生活空間と隣接しているところから、ハルモニたち個別の生涯とその記録に特化した記念館になるべきである」という基本理念を提出し、比較的小規模な専門施設として「日本軍『慰安婦』資料展示館」を提案したが、「歴史館」という模倣とした名前になってしまった。

いずれにせよ、「歴史館」は、はじめに箱物^{ボックス}ありきで、その内容、展示物はその後を追うという急展開であった。そこには「大同」という会社が決定的な役割を果たした。当初、大同から「ナヌムの家」を健康のために良い黄土のオンドル床に改造しようという申し入れがあった。その提案を好機に、慧眞師がはじめは30坪の食堂を依頼したが、「大事なことは一日の食事をとる場ではなくハルモニたちの歴史を後世に残す歴史館だ」と、歴史館へと方向転換したところ、大同の郭正煥^{クワンジョンファン}会長が、会社創立10周年の記念事業として、これを快諾したという。はじめは、50余坪の本造建築という構想であったが、50余坪では歴史館としては狭すぎるという意見が出た。同じ予算でできるから、100坪規模のコングレート建築にしてほしいと提案し、これも快く受け入れられ、最終案が確定した。

ナヌムの家・歴史館の構造と配置

日本軍「慰安婦」歴史館は、向かい合った二階建ての二棟展示館とそれを繋ぐ地下通路からなる特異な構造をもっている。なかなかしゃれたプランで、だけれもが元々そのように設計されたものだと思うだろう。しかし、驚いたことに、仏教的因縁のおおらかさというか、韓国的な行き当たりばったりというか、上記の設立決定の経過でもそうであったように、次々と計画が変更され、偶然而なりゆきで現在の形になったのである。

「ナヌムの家」の敷地は、1992年に仏教徒である趙某氏が、「ナヌムの家設立推進委員会」で行なった募金運動の際に寄贈したものが、当時、その土地はソウル市民の飲み水を供給する上水源保護区域で準農林地だったため、農地法上、農民でない者は家を建てることができなかつた。役所との交渉が行なわれたが、日本軍「慰安婦」ハルモニたちの施設という大義名分によっても公務員の拘子^{くわし}定規な考えを変えさせることはできず、その年の10月、「ナヌムの家」は結局、ソウル市西橋洞に借家住まいすることになった。

それから3年後の1995年、農地法が改定され、ナヌムの家建築のための募金運動は再開された。同年8月、ついに新しい「ナヌムの家」が蹴入れされた。当初、200余坪規模で一棟の建築設計が進められていた。ところが一筆地内で60坪以上の建築許可は下りないというので、やむなく設計変更されて60坪以下の三棟に分けられた。この内、一棟は、ハルモニたちの証言と生涯の痕跡を保存し、歴史教育の現場となる歴史資料館にすることを念頭におき、八角形の一風変わった建物となった。しかし、いざ建築してみると歴史資料館としてはあまりにも狭く粗末であるという意見が強く、一階は訪問客の宿所及び研修所、二階は仏さまをまつる御堂として使うことになった。

次に、歴史館設立の経緯である。1997年、「ナヌムの家」に隣接する300余坪の土地を買い入れ、設計がはじまった。当初、歴史館は100坪で構想されたが、一筆地に60坪以上は建てられないという例の規制で、60坪と40坪の二棟に分けて建築し、二棟を繋ぐ地下通路をつくることになり、地下に慰安所の模型を設ける案が生まれた。しかし、基礎工事をする時、ちょうど地下道部分に巨大な岩石が現れたので、展示館の基礎のかさ上げをして地下道で連結することにいった。そのため建物が高くなり、二棟の展示館の間には階段式の野外小劇場のような空間が作られたのである。また40坪の展示館が立った方の筆地には20余坪を建築する余地があったので、ログハウスを建て、現在、休憩室を兼ねた宿所とした。2000年には、ログハウスに接続して本造の事務室が作られた。

融通の利かない農地法と建築法の規制の枠内でやりくりした結果、「ナヌムの家」と歴史館は60坪以下の建物が6棟という現在の姿になったのである。

建物の完成後、構内には、「手折られた花」の銅像、日本軍「慰安婦」ハルモニたちへの献詩、姜徳景ハルモニの慰霊碑、日本軍「慰安婦」追悼慰霊塔、巨大彫刻「大地の女」などが設置された。最近、姜徳景ハルモニの慰霊碑を境に、ナヌムの家と歴史館を区切る、瓦を戴いた低い土塀が造られた。生活の場と記憶の場に区切りを付けるためとのことである。多くの訪問者によってハルモニたちの日常生活の静安が乱されはしまいかということが、かねてから懸念されていたが、これで少しははじめがつかうことを期待する。なお、ナヌムの家の周辺の林野には、所有主の許可を得てハルモニたちが耕す菜園がある。これらを含めて、ナヌムの家の生活圏といえよう。

ナヌムの家では、次第に老衰してゆくハルモニたちのために、菜園として使っている700坪の隣接地を買い取り、「療養院」(介護施設)を作ろうと、全国で一口30万ウォン(約3万円)の出資者を募る「一坪買い入れ運動」を2002年3月から展開中である。

展示資料

一般にミュージアムは、その予算の3分の2が展示資料の買い入れに当てられるという。しかし、市民たちの募金によって建てられた歴史館にはお金がなく、その資料は、人々の無私な協力により、ほとんど無料で集められたものである。資料購入費がほぼゼロであるということは、学芸員が定着しない問題とともに、歴史館の決定的な弱点であるが、一方、関心を持つ人たちが持ち寄って作った「手作り」の資料展示館であるという特色を肯定的に考えることができるかもしれない。

歴史館の資料は、大きく3つの部類に分けられる。まず、ハルモニたちの遺品や絵である。次に、韓国の芸術家から寄贈、ないしは材料費程度で提供された造形物である。そして、最後に歴史資料であるが、これは、主には日本の研究者や市民から提供されたものである。

歴史館の展示物の白眉はハルモニたちの遺品や作品である。とりわけ、故姜徳景ハルモニ、金順徳ハルモニ、李春女ハルモニによる、ハルモニたち自身の癒しであり、加害者への告発でもある一連の絵は、韓国内だけではなく、日本、アメリカなどで展示会を重ね、見る人たちに強い感動を与えてきた。

また、展示物の中の重要な位置を占めるものとして、歴史資料ではない芸術

造形物がある。日本軍「慰安婦」をテーマにした韓国の一流の芸術家たちの作品は、ハルモニたちの遺品・作品とあいまって、歴史館を無味乾燥な歴史資料の展示場としてではなく、人間の本质を照らし出す、哲学的、芸術的空間として構成するのに重要な役割を果たしている。

歴史資料については、日本の歴史館後援会が資料提供呼びかけキャンペーン(1997-98年)を行い、戦争責任資料センターの林博史氏、西野留美子氏、写真家の伊藤孝司氏、ベルリンの梶村太郎氏などから貴重な資料の提供を受けた。資料収集のために、慧真前院長など沖繩資料収集団は、1997年11月、沖繩で裴奉奇ハルモニの生涯の足跡をたどって、渡嘉敷島の「赤瓦の家」から、ハルモニが住んでいた那覇市内の牧港のアパートまで訪れたり、郷土史家、国吉勇氏の案内で首里の地下壕に入って直接、遺物を探索した。そこで、沖繩の女性史研究家、浦崎成子氏から軍票などを、国吉勇氏からは、日本軍が使用したコンドームや、櫛、鏡の破片、口紅など、地下壕から発掘された貴重な日本軍慰安所の遺物等の提供を受けた。大きな成果の一つは裴奉奇ハルモニ関連資料である。これは、孤独で困難な生活をしてきた裴ハルモニを実の母のように世話をした在日朝鮮人総聯合会沖繩支部の金賢玉副委員長(当時)の提供によるものである(58-59頁参照)。裴ハルモニは、金学順ハルモニより20年も早く、1972年に名乗りをあげ、日本軍「慰安婦」制度を告発した。その名乗りが早すぎたことと、沖繩という遠隔地に居たことなどから、一般の注意を喚起するに至らなかったが、裴ハルモニの遺品を持つ歴史的意義は極めて大きい。裴ハルモニは、祖国が「統一したら(北朝鮮にある)咸興で暮らそうよ」と、言っていたので、その遺品が分断祖国の南(韓国)に行くことには、遺品の保管者であった金賢玉さんの心の葛藤があったという。しかし結局、「遺品が人々に日本軍『慰安婦』問題を正しく認識させ、その解決へと繋がりと、南北の同胞が力を合わせて、その問題を解決する道をひらくなら、ハルモニの遺志に適うことではないか、と考え直し」、寄贈が実現した。実に、歴史館が南北分断や、朝鮮と日本の壁を乗り越えて、人々の心の集うところであることを物語るエピソードである。

今日のナヌムの家

ハルモニたちに人間らしい安定した生活と、公正で透明な運用を保証するために、ナヌムの家を社会福祉専門施設として申請し、1999年11月に社会福祉法人の認可を受けた。その後、老人福祉事業を行なえるように、施設認可を要請し、2000年4月から無料養老施設(入所資格は日本軍「慰安婦」被害ハルモニたちに限り、入